



編集後記

合本の進行

原稿募集 二一世紀を迎えて

天野和夫君の想い出  
『週刊平民新聞』に見る日露戦争期の京都

甲斐道太郎  
編集部

1999.9.27 木 槿 奥田宣子

天野和夫君の想い出

甲斐道太郎

(去る三月) 三日、天野和夫君

が亡くなられ、その追悼文を書く  
ように岩井忠熊先生からご依頼が  
ありました。私は、彼とは五〇年  
にわたる交友関係がありますが、  
同じ法律学でも専門が違い、また、  
私自身は神戸・大阪の大学での勤  
めが長かったので、直接的な交際  
が薄かった時期があつたりして、  
決して適任とはいえません。しか  
し、一番の適任者である片岡昇君  
が体調を崩していて執筆できない  
ということですので、ピンチ・ヒ  
ッターとして書かせていただくな  
とにしました。不十分な点は、そ  
のような事情によるものとお許し

年表によると、天野君は、一九四一（昭和一七）年一〇月（戦時中の旧制高校の半年繰上げ卒業のため）に京都帝国大学文学部哲学科に入学していますが、翌一九四三年一〇月には法学部に入学し直

ものか生前に聞くことが出来なかつたのは残念ですが、彼が哲学的な志向の強い秀才であつたことは間違ひなさそうです。しかし、そのすぐ後に入営のために休学を余儀なくされています。四五年九月に復員・復学し、四七年九月法学部卒業後大学院特別研究生となつて「法理学」の研究生活に入りました（最初は恒藤恭先生の、後に加藤新平先生の指導を受けて）。この特別研究生という制度は、戦時に「徵兵猶予」が停止された中で文科系の学問の継承のために一部の学生の徵兵を免除し一定の給与を与えて研究に従事させるというものでしたが、それが戦後も廢止されずに残つていて大学院での研究を志す院生の貴重な支えになつていたのです。この制度おかげで、戦後の革新的動乱期に新しい民主主義的科学の形成を目指

す若い研究者が沢山養成されましたが。故西村信雄先生が法律学専攻の特別研究生のことを「民主主義法学の青年将校」と呼ばれたと天野君自身が語っています（潮見俊郎編『戦後の法学』）。天野君と同期の法学部特研生には、富山康吉君や牧英正君がいました。

的法律学の基礎を築くというのが、彼の一貫した志向ではなかつたかと思われます。彼の名を一躍高からしめた『抵抗権の合法性』（一九七三）は、このような天野法学の真髓を示すものといってよいでしょう。

す若い研究者が沢山養成されました。故西村信雄先生が法律学専攻の特別研究生のことを「民主主義法学の青年将校」と呼ばれたと天野君自身が語っています（潮見俊隆編『戦後の法学』）。天野君と同期の法学部特研生には、富山康吉君や牧英正君がいました。

私は、片岡昇君たちと一緒に一九四八年四月に特研生の仲間入りをしたのですが、その当時から天野君はあの悠然として思慮に満ちた風格を身につけていたように思われます。私たちは、マルクスやM・ウエーバーなどの読書会を作つて勉強する一方で、濁酒を買つて飲み会をやるなど、戦後法律学の疾風怒涛の時代を、ある意味では楽しんでいたといえるでしょう。そういう中でも、天野君は年齢的にも研究の上でも先輩として一步前を進んでいるように思われました。

彼の学問については、専門を異にする私には語る資格がありません。ただ、私の門外漢としての目から見ると、カントを中心とするドイツ哲学の理解を基礎にして、マルクス主義法学を深く探究し、論理的な批判に耐えうる民主主義

高からしめた『抵抗権の合法性』（一九七二）は、このような天野法学の真髓を示すものといつてよいでしょう。

天野君は、一九五一年に立命館大学に奉職します。当時の立命館は、末川博総長のもと、戦後民主主義科学の牙城のような観がありましたが、彼は若手研究者として水を得た魚のように、研究に運動に活躍します。それを典型的に示すのは「破壊活動防止法反対運動」だろうと思います。末川先生を先頭とする、立命館のみならず全京都の大学人の反対運動は目覚ましいものでしたが、天野君は、その隠れた参謀役を勤めていたと思われます。私自身は、その後、勤務先・住居ともに京都を離れたので、身近に彼の活動を見るることは出来ませんでしたが、嵯川府政の実現と発展とに対する彼の貢献も少なくなかつたことでしょう。

天野君は、一九六九（昭和四四）年から八・九の二期日本学術会議の会員を勤めました。私は、九期に会員に選ばれましたが、この時

## 燎原

の会員選挙では、いわゆる「民科系」の会員に対する「保守派」ないし「反動派」の組織的攻撃が激しく、私たちを誹謗する怪文書が出回りました。法律学・政治学関係の第一部でも、選出された田畠茂二郎一部会長に対しても組織的な抵抗もありうるという噂も流れ、部会にも緊張した空気が充ちていました。天野君は、同世代の渡辺洋三君などと話し合いながら田畠会長を擁護する上で大きな役目を果たしました。新米の私は、もっぱら彼の指示に従つて動くだけでした。

立命館総長・学長に選ばれてから彼の仕事については、ここでは触れません。彼は、その職を退いた頃から持病のリュウマチが悪くなり、いろいろな会合にも姿を見せることが減つて私たちは淋しい思いをしました。しかし、そういう状態にあっても、彼の状況に対する慎重的的確な判断は、京都を中心とする民主的な諸活動について貴重な指針を与えるものとして尊重されていました。いわば「ご意見番」としての存在が我々にとってまだまだ必要とされるときに彼を失ったのは全く大きな痛

手だといわなければなりません。特研のころの彼は、「法学部特研本因坊」を自称するほどの抜群の囲碁の打ち手でした。周りのものがだんだん力をつけてきてその地位を脅かすようになりましたが、天野君の碁はその人となりをそのままに慎重な読みに支えられた重厚な碁でした。学術会議の方開催の後一晩温泉に泊まって鳥鷺を戦わせたこと、また、立命館の大学祭における総長囲碁対局のお相手を頼まれて、大勢の観衆が専門家の解説つきで見守る中見事な勝ちを収めたことは、天野君との長年の付き合いの中でも楽しい思い出です。

(かい みちたろう)

大阪市立大学名誉教授)

## 『週刊平民新聞』に見る 日露戦争期の京都

編集部

### はじめに

一九八〇年に創刊された本誌は、木村京太郎氏をはじめ当時まだ京都で存命中の社会運動家を中心とした「京都民主運動史を語る会」の会報であった。それの人たちの多くは、大正・昭和前期の弾圧下に活動されたので、『燎原』の誌面も今はその人のひとりの貴重な証言をのせてきた。

しかし今やそれら戦前の運動を証言する人はきわめてすくなくなくなつたことはいなめない。語られた証言はいずれも生々しくわれわれに迫つてくる。しかしどうしても欠けてしまうのは、それらの証言者の前史をなす明治から大正前半期の運動の歴史である。『燎原』で語られる体験も、実はその前史なしに展開されたのではない。ただそれを論ずるのは「語る

一、自由、平等、博愛は人生世界に在る所以の三大要義也。

一、吾人は人類の自由を完から

しめんが為めに平・民主義を奉持す、故に門閥の高下、財産の多寡、男女の差別より生ずる階級を打破し、一切の圧制束縛を除去せんことを欲す。

一、吾人は人類をして平等の福利を享けしめんが為めに社会主義を主張す、故に社会をして生産、分配、交通の機關を共有せしめ、その經營処理一に社会全体の為めにせんことを要す。

一、吾人は人類として博愛の道を尽さしめんが為めに平和主義を唱道す、故に人種の区別政体の異同を問はず、世界を挙げて軍備を撤去し、戦争を禁絶せんことを期す。

一、吾人既に多数人類の完全なる自由、平等、博愛を以て理想とす、故に之を実現するの手段も、亦た國法の許す範囲に於て多数人類の与論を喚起し、多数人類の一一致協同を得るに在らざる可らず、夫の暴力に訴へて快を一時に取るが如きは、吾人絶対に之を否認す。(傍点原文)

平民社同人  
その主張は今日においてもなお意

義をうしなわない堂々の文章であるといえよう。

ところで当時の新聞は新聞紙条例によつて東京では千円の保証金を納めなければならなかつた。平民社はこの大金を小島竜太郎の寄付で得たが、新聞の創刊・発行はいうまでもなく多額の費用を要する。その一部に京都府船井郡丹波町須知の大寺主岩崎革也のカンパ

七〇〇円があてられた。一九〇六年(明治三九)の巡査の初任給が一二円だったというから、大変な金額である(塩田庄兵衛「府下最初の社会主義者」京都民報社編『近代京都のあゆみ』かもがわ出版、一九八六)。塩田氏の調査時、岩崎家は須知町に現住しておられた。『週刊平民新聞』の経済的基礎と京都とのかかわりとして特筆しておきたい。

時は間もなく日露開戦となり、「週刊平民新聞」と平民社に対する弾圧は苛酷をきわめた。第二〇号の幸徳の論文「嗚呼増税」で編集人堺が輕禁錮一ヶ月。五一号の「小学教師に告ぐ」その他で西川光次郎と幸徳が輕禁錮五カ月罰金五〇円、印刷機械没収。五三号の堺・幸徳による「共産党宣言」の

訳文掲載で発売禁止、西川・幸徳・堺の罰金八〇円。この間に何べんも集会の解散命令も受けた。そこで『週刊平民新聞』は刊の執行を待たずに一九〇五年(明治三

八)一月二九日の第六号を全紙赤刷で終刊号とし、廃刊を宣言した。一年間の販売紙数は約一〇万部といふ。

『週刊平民新聞』三五号によると京都の直接読者一五名であり、ほかに約一部の売捌店があつたとされる。つまり小売店を通ずる読者が別にあつたわけである。さらに後に紹介するように京都府峯山町には社会主義研究団体が結成されていた。また京都の地理的条件からして社会主義者の往来もかなりあつたようである。また京都帝大教授田島錦治の『近世社会主義』が意外に多くの人物に影響をあたえ、田島自身は社会主義者でなかつたにもかかわらず、かなりの人たちに社会主義への接近の動機となつたことも見逃せない。河上肇はこの頃はまだ東京に在住し、社会主義とは無縁だった。な

柏木義円ら当時の多くのキリスト教社会主義者が同志社から出ていることは見逃せない。以下、京都関係の記事を抄録する。

### 京都と『週刊平民新聞』

○天義香洞主人(京都東山)道に一なし而して兄等の取られし道は其一の道にして真の道也(第三号)一九〇三年一月)

○池田氏(京都)僕は曾て罪悪を犯したるの覚へなく又同胞を泣かしたることもなく誠心誠意労働勤勉して居るも多年間一日も安樂に消光せしことなく苦境にのみ呻吟して居りますが或時田島博士の生産論分配論を聞きまして僕の今日ある否多数同胞の僕と同一の境涯にあるは全く現社会組織の当然の結果で決して偶然でないことに初めて気が付き次で萬朝報にて秋水枯川両兄の感化を受け尚秋水兄の神龍阿部君の主義論を拝讀して遂に社会主義の一信者となりました(第一〇号)一九〇四年一月)

○京都大江素夫氏 女子の職業

大阪の市役所では戸籍部に女子を用ひて居る関西鉄道の出札係にも女子が用ひられて居るが、女子に職業を与へた為に与へた丈の仕事が増へたのなら結構だがソウでない、女子を用ひた丈けづ、男子が入らなくなつて行くのだ……初めは己が女房に職業を勧めて其得て呉れる賃銀で大いに家政に余裕を得ることのできた主人も、終には隣りの細君に自分の職を奪はれて結局己が女房の儲けで二人食ふて行かねばならぬ様な奇觀が生じて來はしまい乎、若しも來たらば騒ぎだ……此の理を以て余は女子に職業を奨励することを当分好まぬ、寧ろ恐れて寒心する（第一二号 一九〇四年一月）

○京都府士族土井信孝と称する者 大阪西成の或飲食店にて散飲食し、勘定を請求せらるゝに及び、乃公を誰だと思ふ陸軍砲兵大尉だと、威猛高になつて叱り飛ばし狼籍を極めたり、是れ亦活潑なる軍人の常として深く咎むるに足らざる乎（第二三号 一九〇

四年一月）

○村上専精氏の演説 余曾て親鸞上人降誕祝賀演説会に於て氏の演説を聞く、氏曰く「親鸞上人は貴族なり是別に大した事に非ずと雖も、耶蘇の如き一平民に比しては頗ぶる気持よきに非ずや」と、後日又「釈迦の人格の世界に冠たる所以」てふ演説を聞く、氏第一に指を屈して曰く「釈迦は國王の子なり、耶蘇は一賤業たる大工の子に非ずや……又氣持良からずや」と妙なことを気持よかる宗教家もあるもの哉（京都 好川生 第一七号 一九〇四年三月）

○安部磯雄氏 余は十五歳の時京都同志社に入り十八歳の時に基督教を奉じた。爾來余が心を常に傾けしは、如何にして貧民を救ふべきかの問題であった、今も尚ほ善く記憶しあつた、今も尚ほ善く記憶して居るが、明治十七年同志社を卒業した時、余は卒業演説に「宗教と経済」といふ題を選んだのである。これは言ふまでもなく宗教と経済を以て社会救済の任に當りたいといふ自己の決心を現はしたので

ある。然し如何にせば貧民を救済することが出来るかに付きては未だ確たる意見は有して居なかつた。其後殆んど七年は盲者が物を探る様に其救済法を考へて居たのであるが、恰も明治二十五年の夏、余は米国の或学校の寄宿舎にて閑静なる生活を為して居た時、因らずもバラミーの『百年後の社会』を読んだのである。實にこれは余に取りて非常のインスピレーションであった。恰も盲人の眼が開きて天日を仰いたる如き感に打たれた。其からは社会主義に関する著書數十冊を手当り次第に読んで、茲に初めて数年来の疑問が晴れ、全く社会主義に依りて救済事業を実行せんとの決定をなした。（第一九号 一九〇四年三月）

○記者よ皮肉の言を謹しめよ、一面に於て唄へられたる主張は二面に於ける皮肉文字によりて嫌惡の情を生ぜしむ「細君を柳行李に詰めよ」とか「妻子を切殺して出陣したらば喜ぶだらう」とは何等意地悪き云ひ方ぞや、之を謹しめよ（京都 花やあらぬ生第二〇号 一九〇四年三月）

○戦争と売薬 京都の某売薬店新たに風邪薬を発売せんと、予に其処方を求めて曰く、今日類多き売薬の中に、新に名を成さんと欲せば通常一般の手段にては覚束なし、故に先づ方名を時局に因みて風邪水雷と称し、其効能は日本の水雷の如しと廣告し、余の処方に加ふるに、ドクトル佐伯、斎藤仙也両先生及び大学の某内科部長の保証を以てせば、其薬名を天下に博すると同時に予も亦甚だ名譽を得ることとなりて總て妙ならずや」とされど予は斯の如きエラキ人物に提燈を持たせるを好まざれば之を謝絶せり、然れども余は多くの事を学び得たり、一、売薬商人迄が戦争を利用して私利を営まんとする事。二、是れ生存競争、商業競争の悪結果なる事。三、売薬に施されたる学士博士等の保証が信用すべきものに非ざること然り而して憐むべきは斯の如き売薬に倚頼せざるを得ざる彼の多くの貧民なり（キレイ

## 戦争と庶民

一医生 第二二号 一九〇  
四年四月)

二号 一九〇四年四月)

一医生 第二二号 一九〇  
四年四月)

○京都西陣の職工数千人が非常

の困窮に陥つて居ることは、前号に記したが彼等は今では粥の施行で命を繋いで居る△

高木文平といふ人の議論が面白、曰く西陣の粥施行は戦勝国の名誉に恥べき事柄で、折角予定額に数倍の国債応募者が有たに対しても申訳ないことだ、萬一外国新聞記者が実地を見聞して通信でもすれば、非常の耻辱だ、窮民のあらるるのは西陣には限らぬ、然るに此地のみ斯る惰民増長のことをやるのは、失態極る話しだ云々、……京都の不景気是非常なもので、七万戸の都市に、一万戸の空家が出来たといふことだ。京極のやうな繁昌の通にさへ、六七軒の貸家札が貼である。△人民を悲観に陥らしめるのは勿論悪い、併し既に悲觀に陥るべき原因があるのに之を除かないで、徒らに臭い物に蓋するのは、更に悪くは無からう歟(第一

○戦争が生める窮民 戰争の影響にて京都西陣に五千の窮民出来し由は既に報道したるが尚聞く所によれば

同地には糠一升に米一合と云ふ飯をだん食に困りて、身投する者日々十四五名位づつもある由なり

而て戦争の影響にて窮民の出来しは、独り、京都西陣のみにあらず……(第三三号 一九〇四年四月)

○丹後 縮緬の取引皆無なり當業者は仲買より原料を貸与せられて製織するもの十中八九なるに近頃売行なきた為め其貸与なく生糸の輸出好況なる

ことだ、萬一外國新聞記者が

実地を見聞して通信でもすれば、非常の耻辱だ、窮民のあらるるのは西陣には限らぬ、然るに此地のみ斯る惰民増長のことをやるのは、失態極る話しだ云々、……京都の不景気是非常なもので、七万戸の都市に、一万戸の空家が出来たといふことだ。京極のやうな繁昌の通にさへ、六七軒の貸家札が貼である。△人民を悲観に陥らしめるのは勿論悪い、併し既に悲觀に陥るべき原因があるのに之を除かないで、徒らに臭い物に蓋するのは、更に悪くは無からう歟(第一

「マカロフが死んで愉快ですわ！溺れ死んだとねー水の一斗も呑んだでしょう、ア、愉快！私は愉快でたまりません

からココまで駆けて来たのよ、途中でねー小供を踏み倒しましたけれども急ぎますので後なんか見ずに駆けて来たよ、アしんどい、この次はクロパトキンが首でも吊れば気味がよからうねーあなた」と、噫戦争！戦争は実に京美人の桃花の如き其唇頭よりしてすらスかる語を発するに至らしめたり(京都 上野難学

第一八号 一九〇四年五月)

○平民俱楽部講演会(丹後)去十二日午後八時より第三回講演会を峯山増長院に於て開く、演題は△社会的思潮の鼓吹(高橋渓水)△峯山の交通対し転業しつゝあり(第二四号 一九〇四年四月)

○丹後 縮緬の取引皆無なり當業者は仲買より原料を貸与せられて製織するもの十中八九なるに近頃売行なきた為め其貸与なく生糸の輸出好況なることだ。出立する前に滋賀日報の社主三上忠七氏に謁見せらる、御陵の派出所で「新聞屋待て」と喚びとめられて姓名を尋問せられた、京都へ着いて同志渡辺道雄、児玉花外の諸氏を訪ひ、丸太橋の辺なる同志社守永勲の宅に落ち付き、同志を訪ふて小原静一、高畠素之、関原喜代松、大石真子、大石七分の諸氏に

拾錢也 京都建仁寺町 長谷川英太郎氏

○丹後峯山平民俱楽部講演会(第四回)去月二十四日午後八時より例の場所にて開会講演者は岩井天隨(内敵を征服せよ)、西木告天子(自由競争と峯山)、及西木素水(戦争と記念物)の三氏にして、三氏の講演了りて後宮田子行氏の警告的演説ありて十時閉会せり(平民俱楽部幹事 第四八号 一九〇四年一〇月)

## 伝道行商京都へ

△伝道行商の記(七) 小田生山口生

○十一月三日 晴 探偵は隣室に徹夜で監視してをつた、御苦勞なことだ。出立する前に滋賀日報の社主三上忠七氏に謁見せらる、御陵の派出所で「新聞屋待て」と喚びとめられて姓名を尋問せられた、京都へ着いて同志渡辺道雄、児玉花外の諸氏を訪ひ、丸太橋の辺なる同志社守永勲の宅に落ち付き、同志を訪ふて小原静一、高畠素之、関原喜代松、大石真子、大石七分の諸氏に

○平民社維持金寄附広告 金武

面会した。大石二子は紀州の同志大石綠亭を叔父とし、大和の同志西村伊作氏を兄とし、真子氏は十八才、七分氏は十五才、共に若き熱烈なるソシエリストである。聞けば何れの学校も奮闘的生活が大流行で、或る基督教の学校では青年の進取の気象を沮喪せしむる恐があるといつて平民新聞の講読を禁じてゐる宅へ帰ると守永氏は僕等が宿泊してゐる為め度々警察署へ召喚せられたそうだ。夜児玉花外、小川実也の二氏來訪、亡き松岡荒村君のことを語った。この一週間に於て五名の同志を作り、七十四冊の社会主義書類を売つた、探偵は夜も碌々寝ずに尾行して居つても書物は売れるから妙じやないか（第57号 一九〇四年一二月）

## △伝道行商記（十）

○十二月四日 晴 守永君の二階から見ると、東山は紅、黄、樺、茶褐色に奇麗な装飾を施してある。同志社の大石七分氏來訪、相携へて行商に歩く、昼飯は同志社の食堂で啖つて、太宮秀貞、今泉真幸、

同志大石綠亭を叔父とし、大和の同志西村伊作氏を兄とし、真子氏は十八才、七分氏は十五才、共に若き熱烈なるソシエリストである。聞けば何れの学校も奮闘的生活が大流行で、或る基督教の学校では青年の進取の気象を沮喪せしむる恐があるといつて平民新聞の講読を禁じてゐる宅へ

奥亀太郎の諸氏を訪ぶた。奥氏の宅には平民新聞を読んでゐる為め巡查が調べに来たこと、守永氏の宅には僕等が泊まつてゐる為め探偵の出入がはげしく家人が大変迷惑があるので、とう／＼下京土手町の岩瀬藤吉の所に逃げ出した。我等は探偵を恐がつて社会主義の運動を止めるものにあらず、迫害来れ、雨の如く来れ、我等は猿轡を鉗められて鮮血淋漓たるも尚ほこの主義を唱へて止まざる決心だ、昔の使徒は言つた我は福音を恥とせずと、吾人は社会主義者たるを榮とするものである。

## ○六日 晴

今日は警察から二人と、憲兵部から一人の曹長殿と、都合三人の探偵君朝から僕等の宿につめかけた。

今日は行商を休業して洛外に遊びに行つた。青絹の如き秋の空、大氣は澄み、雲影は動き、光線はきらめき、染まるが如き青松に、散り残りたる紅葉の火の如く燃えて輝き、ゆく秋の清くさびしき気が骨に沁むやうだ

## ○『京都朝報』

記者家入経晴氏は、去二月四日『京都朝報』

紙上に「世態観」と題し「法律は弱者を殺す者なり、政治は悪魔の機關なり、道徳は弱者を助くる偽善の看板なり：貧者よ、労働者よ、弱者よ、起て、何時までか此醜辱を忍ぶべき、眞の正義は最後の勝

き様な次第、昨夕も兄等の悄々たる後影を眺めて、小生の胸中何とも云へぬ無量の感概湧き來り候、昨夜は如何遊がる所以、どう／＼下京土手町の岩瀬藤吉の所に逃げ出した。我等は探偵を恐がつて社会主義の運動を止めるものにあらず、迫害来れ、雨の如く来れ、我等は猿轡を鉗められ

て鮮血淋漓たるも尚ほこの主義を唱へて止まざる決心だ、昔の使徒は言つた我は福音を恥とせずと、吾人は社会主義者たるを榮とするものである。

○五日 晴 相変らず一人の探偵に尾行されつつ市中を行商して歩く、野々村直太郎、石黒猛二郎、望月與三郎の諸氏を訪ひ、同志社小立花ふく子姉の宅にて晚餐の御馳走になる、同志社の大石真子、大石七分、高畠素之の三君から白い奇麗な靴下と手袋を贈られた、温情洵に感謝せねばならぬ、児玉花外君は餅菓子を贈られ、その手紙に「重ね／＼の迫害に、君等の宿る所もな

伏見の町で安田英之助、四方卯三郎の二氏を尋ねた。淀川の沿岸は一帯の平原で、そよ吹く秋風に尾花の穂が白く靡き合ふて汀は半ば青く半ば黃ばみたる芦荻浦葦が深く蔽ひつゝみて、刈草を高く積みかさねた泥船が漕ぎ上がって来るのが見える、山崎の木賃宿に着いて、老夫婦に社会主義を説教した所、地獄で佛に逢つたやうに喜んで、そんな結構な世界が見て死にたいと歎息した。夜遅くまで老夫婦と語つて、この近所の労働者が、二十七日間も傭はれて八十銭の賃銀しか貰はぬこと、一日やつと十貫目の繩をこしらへて七銭しか貰へぬことなど聞いた（第五八号 一九〇四年一二月）

○『京都朝報』記者家入経晴氏は、去二月四日『京都朝報』紙上に「世態観」と題し「法律は弱者を殺す者なり、政治は悪魔の機關なり、道徳は弱者を助くる偽善の看板なり：貧者よ、労働者よ、弱者よ、起て、何時までか此醜辱を忍ぶべき、眞の正義は最後の勝

利者なり、何ぞ蹶起して彼等を殲滅に帰せしめざる云々

と記せしが為め、新聞紙条例

違犯を以て告発され去十九日

京都地方裁判所に於て罰金五

十円に処せられたり(第五九

号一九〇四年一二月)

以上が『週刊平民新聞』京都関係

記事であるが、あるいは見落とし

があるかも知れない。おゆるしを

こう。なお日露戦争と京都につい

ては京都府立総合資料館編『京都

府百年の資料』政治行政編、西

陣・丹後機業については同書の商

工編にかなり詳細な記述がある。

一九七二年の刊行になる。しかし

『週刊平民新聞』に登場した京都

の人物は、高畠素之・児玉花外の

ような著名人を除くと、その後の

消息がまったく分からぬ。「京

都の民主運動史」を語るために、

いつの日か解明したいものであ

る。読者の御参考までに紹介した。

(編集部)

## 原稿募集

### 二一世紀を迎えて

次号はいよいよ二一世紀最

初の号となります。読者諸氏

もさまざまの感慨をおもちの

ことでしょう。二〇世紀のこ

し方を回顧しつつ新世紀を展

望する、絶好のチャンスとい

えます。四〇〇字五九枚く

らいで、任意の題目による原

稿を募集します。一三二号以

下に連載しようと思いますの

で、奮って御応募ください。

## 編集後記

いよいよ二〇世紀最後の号とな

りました。これから世界・人類

そして日本はどうなるのか。国会

は参議院選挙の非拘束名簿制をめ

ぐつて激突がつづいています。人

気タレントの票で多数を制しようと

いうのは一種の詐偽的手法で

す。このような大衆操作には、か

つてのファシズムのにおいがしま

す。

民衆の民主主義的自覚を底でさ

さえるのは、歴史的経験の認識に

ほかなりません。近ごろ会員の投

稿が減少の傾向にあります。今号

に編集部による『週刊平民新聞』

からの摘録をのせた理由の一半

は、投稿の減少のためです。会誌



充実のため、皆さまの積極的な投

稿を願つてやみません。テーマは

自由です。

〔訂正〕一三〇号「前代表天野和夫  
氏の思い出」の「同君は筆者より一年  
はやく生まれ」を「一年おそく生まれ」

に訂正します。

(岩井)

会および会報については、  
左記へご連絡ください。  
〔事務局〕

〒六〇五一〇九五二

京都市東山区今熊野

南日吉町三九 奥村和郎

TEL FAX  
○七五五五六一一七四八五